



保育の感情労働研究会通信 第4号

2013.02.25
NPO法人さやま保育サポートの会
保育サポート研究所 04-2957-0451

寒風吹きすさぶ東京未来大学での研究会から2ヶ月。春の余寒とはいえ、陽射しはきらきら煌めいて、春はもうすぐそこに。今回の第4号は「保育における感情労働」のひろがり特集です。一つは講演会や研究会を実施しての感想、及び書評、保育者や保育学生さんの『保育における感情労働』に対する感想文を特集しました。これからも順次ご紹介しますので、どんどん原稿をお寄せ下さい。

石川県社会福祉協議会保育部会平成24年度第2回保育所理事長・所長研修会

「感情労働とはなにか—保育の質を高める園運営をめざしてー」を開催して感じたこと

石川県社会福祉協議会保育部会長・額小鳩保育園園長 前田 武司

去る2月19・20日、石川県の和倉温泉において、県下の保育所理事長・所長（参加者117名：公立57；私立60）を対象に、諒訪きぬ先生をお招きして標題の様な研修会を開催致しました。目的は保育現場の管理職に「感情労働」を理解してもらい「保育者の感情労働を意識した保育所運営体制」を考えてもらうことです。初日に保育における感情労働に関する基礎講義、2日目に事例を取り入れたグループワークを行いました。

開催に当たっては、まだまだ馴染のない概念である「保育における感情労働」が管理職に正しく理解され、その上で保育者のサポート体制にまで思いを致してもらえるのか、かなり心配でした。しかし、現場経験を有していたり、保育者育成に課題を感じていたりする参加者が多かったせいか、初日の講義が進むにつれ、この概念が会場で共有化され、会場の熱が高まっていくのが肌で感じられました。2日目は2時間半の事例検討ワーク。組織の運営体制を詳細に検討するには時間不足でしたが、初日のエネルギーがワークに引き継がれ、15グループそれぞれが、事例を自分たちの現状に引き付け、真剣かつリアルな議論を展開していました。

これから保育界において、保育の質を左右すると思われる「感情労働としての保育」という枠組みが、石川の地で更に議論され、実践現場で生かしていくよう力を尽くしたいと考えています。

保育士養成協議会北海道ブロック大会

保育者の役割と職場環境「感情労働」をめぐる一考察》 東北大学 神谷哲司

お話しした役割理論と情動知能と同じものでした。この会では、昨年も諒訪先生が感情労働についてお話されていたそうです、また、参加者が養成校の先生方なの、「感情労働」という概念に混乱は見られなかったようです。最後に私見として「具体的なプログラムというよりも、日常的な指導の中に位置づけることに意味があるのではないか、という話をしたことから、「感情労働」を養成校でどのように位置づけるのか」について、多少踏み込んだ議論もなされました。十分な返答はできませんでしたが、今後ともみなさんと考えまいりたいと思います。

理事長・園長先生の感情労働研修の感想

* 感情労働の大切さを知りました！

保育者が感情を上手にコントロールするには、演技するかどうかが大事なのではなく、保育者が自分や他者の感情の動きに対して目や気を配ることの大切さ、そして自らが感情を動かすことの重要性を改めて理解することが出来ました。

* 34年間感情労働を重ねてきた私を見出しました！

感情労働を学んで、園長という立場だけでなく、新任時代、中堅、主任としてのその時々の自分が思い出されました。その時どきの自分を思い起こしながら、職員一人一人に接し、共に子どものための保育を充実させていきたいと感じました。

* 今後の園運営に生かしたい！

感情の出し方に困惑している職員もいますので、感情のコントロールの大切さを痛感しました。感情労働は初めてでしたが興味深い内容でした。今後の園の運営に生かしていきたいと思います

『保育における感情労働』はどう読まれているか？ 書評・保育者・保育学生の感想

1. 書評

日本保育学会会報 NO.155

新刊図書の紹介

このコ
ー
ていたた
く

「保育における感情労働」 —保育者の専門性を考える視点として—

諫訪きぬ 監修

戸田有一・中坪史典・高橋真由美・上月智晴 編著
2011年1月 北大路書房

本書は、保育者の労働に「感情労働」という切り口から迫る、シンポジウム形式の著書である。保育者が感情を操作して保育に取り組むといった仮説をもとに議論が展開され、保育実践者のリアルなエピソードと保育研究者の鋭い考察とが描かれている。

そして保育実践者の一人として、保育を「感情労働」として括ることや、「表層演技」「深層演技」という言葉へ違和感を持つといった保育実践者の本音や議論に共感できる。なぜならば保育の中には、感情のコントロールを越えた、無償の愛情も確かに存在しているからである。

保育実践者は現場だからこそ分かる子どもの内面や保育者の心の動きが理解でき、保育研究者はそのセンスの良い問いか分析力で保育を可視化することができる。両者のコラボレーションによって、より質の高い保育学研究が可能になると見える私にとって、本書はまさに理想的なテキストであるといえる。

佐藤 賢一郎（つくば市 保育士）

日本保育学会会報 NO.155 2013・1

の「新刊図書紹介」に掲載された
つくば市の保育士さんの書評です

こどもセミナーについて

名寄市立大学短期大学部

児童学科 傳馬淳一郎

日本最北に位置する小さな公立大学として、名寄市立大学は北海道を中心に保育者を輩出している。卒業生へのリカレント、地域の保育現場の研修の機会として、本学では毎年セミナーを開催してきた。過去には北海道の広大な地域性を背景に名寄を離れ北海道内のいくつかの都市で近隣の保育者を対象とした「保育セミナー」を開催した時期もあった。名寄を拠点として開催するようになり、この数年間は「こども一人ひとりを大切にするために」とのテーマのもと、保育現場の実情を捉えながら、明日への保育が拓かれていくようなセミナーを目指して回を重ねている。

本学児童学科の定員は 50 名、1 年次・2 年次にそれぞれ少人数のゼミナール制をとっているため、学生と教員の距離も比較的近いことが特徴の一つとして挙げができる。卒業後はじめての園外研修として、または同期の仲間たちと再会するために、セミナーに参加する卒業生も多い。持参する土産は、元気な笑顔と楽しい職場の話…ばかりではない。働き始めて間もない卒業生からの苦労話を耳にするたびに「どんな仕事も数年間は大変だ」との声をかけ続けていた。しかし、卒業生が感じる「大変さ」には、漠然としながらも、いくつかの要因があるものを感じていた。者対人援助職特有の対「人」との関係、特に子ども・保護者・職員同士の関係など、保育者として求められる多忙を極める業務と相まって、経験の浅い保育者に大きな波が一気に押し寄せる。所属する園の一保育者として求められる役割を演じながら、大きな波に飲み込まれるようにして数年後退職してしまうか、または流れに身を任せ自分も波の一部のごとく保育者として適応していくかの選択を迫られているように見えれる。

「私は、ダメな保育をしている…」と自らの保育を省察する卒業生の姿は、成長し続ける保育者の姿として捉えることができる。自らの保育を振り返り、より良き保育を追求する所へとすら

2. 名寄市立大学短期大学部こどもセミナー 「保護者支援において保育者に求められるもの」 2012・11 に参加した卒業生の手記

*先輩保育士に指摘され動けなくなった私…

今年の4月、それまでずっと夢だった保育士としての生活が始まりました。始めは、様々なことに対して緊張と不安で一杯になり、気がついた時には1日が終わる日々を過ごしていました。

そのうち仕事に慣れてきた頃から、周りの先輩保育士に指摘を受けるようになりました。「先生、表情があまり変わらないから、もっとオーバーにしたら良いよ！」「先生は新人だけど、正規職だから先生から声を出さないと！」

そう言われていくうちに、気がつけば自分の本心で動けずに、無表情になることが多くなり、同時に自分から進んで話すこともできなくなりました。「今日も何か言われるのかな…」と、周りの反応を過剰に気にして、差し障りのないように過ごすことが増えてきたある日、一緒にクラスの担当をしている先生から、「先生ね、何か思ってることないのかな？あまりにも言葉が少ないよ」と聽かれました。

言葉が少ないのでではなくて、どう話そうか迷って言葉が詰まるごと、ありのままの感情で子どもと接したいこと等、思っていた事を話すと、「でもね、何事も正規職の先生が声に出さないと、何も始まらないんだよ」と言われ、その納得できない負担感と違和感に押しつぶされそうになってしまいました。

その時に、大学の頃に一番信頼してお世話になった先生が「感情労働」についての本を読んでいた事を思い出し、私も『保育における感情労働』を手に取ることにしました。本を読み進めていくと、自分が今まで自然に出てきていた感情規則に縛られていたことなどに気づくことができ、それまで感じていた負担感や違和感が減少し、とても楽に人と関われるようになりました。そして今回、子どもセミナーで諒訪きぬ先生の基調講演、シンポジウムを聴き、心の底にある想いを言えることの大切さを学ぶことができました。

現在、職場の机の隅に感情労働の本とセミナーの資料を置いて、日々の保育をしています。まだまだ自分が理想としていた保育からは程遠く、無事に1日を終えることに必死な日々が続いています。しかし、「感情労働って何?」とある先生から聽かれ、自分達の保育を見直す機会も少しずつ出てくるようになりました。これからも、親子、先輩保育士と一緒に本心でぶつかり合いながらも、たくさん悩んで、喜び合いながら成長していくように、今回学んだことを活かしていきたいです。 (保育士1年目の卒業生Hさんの感想)

卒業生に養成校教員として安心する。むしろ誇らしく感じられることすらある。しかしながら同時に、保育者自身が自らの保育を自己否定する姿として捉えるのならば、実に痛々しい姿ではないだろうか。もしかすると「子ども一人ひとりを大切にする」とのテーマ自体、こうした保育者たちを苦しめる可能性もあるのではないか。こうした養成側の省察も踏まながら、今年度は「保育における感情労働」の視点を取り入れながら「保護者支援」をテーマにセミナーを実施する運びとなった。



こどもセミナーでの基調講演「保護者支援と保育の感情労働」及びシンポジウム「保育者に求められるもの」を終えて、傳馬ゼミの2年生の学生さんと…

思い描いていた保育士像とはかけ離れた自分と戦う毎日

わたしは就職2年目の公務員保育士です。夢だった保育士になることはできたものの、思い描いていた保育士像とはかけ離れた自分と戦う毎日です。1年目から同じ職場に同期がいなく、年齢の近い先輩でも5年は経験が上なので、わたしは実習生のような存在でした。出来るのが当たり前の環境、複数担任でさまざまな保育観の中での保育は“ダメな保育士”だと思われないように必死でした。周りの保育士に追いつこうと頑張るわたしの保育は、子どもをきちんとさせようと怒ったり急かしたり…の毎日。1日が終わると子どもに対する罪悪感でいっぱいでしたが、私には“できない保育士”にならないことが1番で、そのための精一杯の保育でした。だんだん罪悪感が薄くなっていくことが怖かったのですが、慣れてしまったほうが楽になると感じたのも事実です。それでも保護者とは比較的に良い関係を保つことができていたので、私の救いになっていました。しかし保護者の方との距離が縮まり、信頼や感謝の言葉をかけていただく度に自分の保育を思い出し、とても申し訳ない気持ちになりました。

保育士、子ども、保護者にも引け目を感じ、保育士としてやっていく自信もなくモヤモヤした気持ちのまま2年目に突入し、出会ったのが「感情労働」です。初めはただなんとなく読み始めたのですが、今まで“こうするしかない”と言い聞かせてきたことや、“こうではいけない”と思っていた緊張感が一気に緩みました。そしてずっと引け目を感じていたほかの保育士に対しても、“最初はみんな同じ想いをもっていたのかな”“自分の気持ちをコントロールして苦しかったのでは”と思えるようになりました。きっとそれぞれの保育士が今まで積み上げてきた保育経験や保育観があるので、今すぐには“感情労働”が受け入れられると思いませんが、感情労働を視点として保育を語れる日がくることを信じて、もうちょっと頑張ってみようと思います。

(保育2年目の卒業生Kさんの感想)

雪降りしきる名寄のこどもセミナーでの嬉しい体験

諒訪 きぬ

『保育における感情労働』を「保育者の専門性を考える視点にしたい」と世に問うてから、監修者としてはこの目新しい書物が 保育者にどう読まれるのか、そして私たちが意図するような保育者に役立つものになるのか、ハラハラドキドキの日々でした。学会でラウンドテーブルを開き続けてきましたが、確たる手応えはありません。名寄大学で出会った卒業生や傳馬ゼミの学生たちのこの本への感想を伺って、監修者として力強い味方に出会った感じがしました。保育の世界に居づこうとする皆さんへの応援歌を歌い続けたいと思います。

3. 傳馬ゼミ2年生の「保育の感情労働」を読んでの感想

越智望実

ゼミの中で感情労働を読み、最初は「子どもに対して自分は演技をしているのかな?」「ポジティブな感情労働? ネガティブな感情労働って何だろう?」と疑問ばかりでした。また、私も保育者に対して「いつも明るく笑顔で」「子ども一人ひとりに寄り添う」等のイメージを持っていました。それは私が保育所に通っていた頃の先生が、いつも笑顔で楽しませてくれたことが強く残っているからです。

ですが実際に実習では、子どもと関わっていて心から笑えて楽しいと思える時もあれば、思うように関われなかったり、疲れている時には「笑顔でいなければ」と思い、笑顔を作ってしまうこともあります。

感情労働に出会う前には「疲れているけど笑顔でいなきゃ、子どもに楽しんでもらいたい…」という気持ちだけでした。『保育における感情労働』を読んでからは「今のは演技だったのかな?」と振り返った時に感じるようになりました。泥団子のお話のような場面で、「先生もっと食べたいな~」「〇味も作ってほしいな」等と子どもに楽しんでもらえるように、保育者自身も子どもと楽しもうと思えることは、これから 100%できることではないと私は感じました。少なからず自分の気持ち(感情)を抑えたり、コントロールしながら子どもに向かって保育を行っていかなければならぬと思います。

でも感情労働をすることは悪いことではなくて、自分でコントロールしていくことが大切だと思い、私の保育に対しての視野も広がりました。そして、様々な感情を抱きながらも、子どもへの思いを忘れずに持ち続けていきたいと思いました。

これから現場に出る前に『感情労働』を読み、保育者を目指す仲間達と保育について深め合うことができて本当に良かったです。

猪羽優衣

私は感情労働を読んだ時、初めて聞く言葉や内容に戸惑いを感じていました。いつでも子どもに寄り添っていなくてはならない、笑顔は絶対に必要だという考え方を持ちながら実習も行っていました。その考え方で実習の際には、毎回他人と自分を比較しながら「自分は保育者に向いていないんだ」と自信を失っていました。常に子どもの気持ちを考えて遊び関わることに苦痛を感じてしまう時もありました。純粋に子どもと過ごす時間を楽しめないこと、子どもではなく職員からの評価を気にしてしまう自分に自己嫌悪を感じることも少なくありませんでした。そういった自分の感情を出さないことが、私の中では当たり前だと感じていました。しかし、感情労働を読み終えて、またゼミの仲間

諸橋侑依

「保育における感情労働」を読むまでは、子ども一人一人にしっかりと寄り添い、目に見える子どもの活動だけでなく内面にまで目を向けることが大切だということを『保育者の地平』から学び、私自身もそんな保育をしたいと思っていました。しかし、その理想とする保育をするのは難しいと実習を通して感じるとともに、保育者は自分の感情をコントロールしながら保育をしているということを『保育における感情労働』から学びました。私自身、「保育者は常に笑顔で明るく」というイメージが根付いていましたし、「保育者になるんだから子どもに対してこんな感情抱いたら駄目だ」と実習中に子どもとの関わりの中でのマイナスの感情はあってはならないと思い、感情を抑えて子どもと関わることもありました。

実習中の出来事です。クラスの子どもたちが騒いでいて私の声に耳を傾けてくれなかったことがあります。このとき、「どうしたらしいのだろう」「子どもたちをまとめられない…もう嫌だ…」と正直マイナスな感情を抱いていました。そのマイナスな感情を顔に出さないよう、笑顔を心掛けて子どもたちに接していました。その日、クラス担任の保育者から「A君が、『先生(実習生である私)疲れた顔しているから聞きたいことあるけど聞けない』って私に言いにきましたよ」と言われた経験があります。今、実習を振り返ると、私自身マイナスな感情を抑えて子どもたちに笑顔で明るく関わるというように感情労働をしていたことに気付かされました(実習中は自分が感情労働しているとは思っていませんでした)。そして、いくら笑顔を心掛けてポジティブな関わりをしようとしても、本当の感情を押し殺して表現している偽りの感情は子どもたちに気付かれるということ知りました。

『保育における感情労働』を読んでいく中で共感できる部分も多くあり、「マイナスな感情を抱いているのは自分だけじゃない」と感じることができ、心に少し余裕を持てた気がします。自分の感情を素直に表現し、心に余裕を持ちながら保育ができ

と話し合いを重ねていくうちに、そう思うことが悪い訳ではない、自分だけではないんだと思うことができました。同時に、他者への理解も深まったように感じます。自分の中では当たり前でも、その当たり前が苦痛になり保育を諦めてしまう人もいます。そういう人たちへの理解も更に深まり、また自分を見つめ直すきっかけにもなったように思えます。もっとたくさん的人が『感情労働』を読んで、理解を深めて欲しいと感じました。しかし、「これでいいんだ」と終わってしまってはいけないとも思っています。あくまでも理想は追い求めながら、保育をしていきたいと思いました。